

# 盆栽の図像学

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

歌川国芳《逢身八懐 窓先夜雨》  
 団扇絵 22.6×29.5cm 弘化元年〜4年（1844〜47）  
 版元／藤岡屋慶次郎 個人蔵

浮世絵師紹介

歌川国芳（うたがわくによし）（1797〜1862）

江戸時代末期の浮世絵師。文化8年（1811）に初代歌川豊国の門に入る。小説の流行とともに武者絵の第一人者として頭角を現し、これに見立てた政治風刺画で拔群の人気を得る。他にも狸や金魚等を人間のように振舞わせるユーモラスな戯画や、三枚続きの画面形式を生かした迫力ある構図は、現代においてもなお刺激的な作図と言える。

## 松と花魁

浮世絵版画の一大ジャンルである美人画。そこに描かれるのは、ほとんどが江戸唯一の官許の遊郭、吉原の遊女たちである。浅草寺北東の浅草田んぼの中に造営された人工都市・新吉原は、営業が夜をまたぐために「不夜城」とも、遊女らの身の境遇から「苦界」とも呼ばれた。しかしそうした側面がある一方で、現代にも言えることであるが、吉原はこの時代の文化を牽引した最先端の場でもあった。多くの文化人たちが吉原に集まり、いわゆる琴棋書画の教養を積んだ遊女と共に、江戸文芸の拠点ともなった文化サロンが形成されたのである。

魅惑の都市・吉原を彩る花々の頂点に君臨するのが、各妓楼の顔となる高級遊女、花魁である。花魁を描いた絵の享受者には、男性のみならず、他ならぬ江戸の女性たちもいた。その豪華な着物、髪飾り、鬢の形状にいたる最先端のきらびやかなファッションが、女性たちの心をも射るのである。吉原の花魁とは、さしずめ現代における「セレブ」とも言える存在であり、その容姿や言動は浮世絵版画などの出版物を通して伝えられ、男女を問わず江戸時代の人々に話題を提供したのである。

今月は、こうした江戸のセレブ・花魁の素顔をほんの少し垣間見ることのできる絵を紹介したい。花魁の生活の脇にそっと置かれた松の鉢植を通して、女性として、そして気概のある花魁としての素顔の想いが、しんみりと伝わる美人画である。

## 見立て近江八景

本図はその外形上からわかるように、切り抜いて団扇に貼り付ける団扇絵とし



## 第三十四回

### 歌川国芳《逢身八懐 窓先夜雨》

解説／田口文哉

て制作されている。実用に供される版画のため、現存する作例が少ない貴重な品である。描かれたのは、髪に差す豪華な笄（こうがい）に宝玉を囲む鶴丸文様が施された、お蘭黒の吉原遊女である。花魁の象徴とも言える打掛を羽織ってはいないが、こうした飾りからは格の高さが見受けられ、座敷でのプライベートのひと時を描いたものと思われる。

本図の第一段階の読み取りは、題名から明らかになる。「逢身八懐」とは、江戸時代頃から歌に詠まれはじめたと考えられている、琵琶湖南部の八つの景勝地である「近江八景」（元来は中国の画題「瀟湘八景」をもじったものであり、続く「窓先夜雨」とは、近江八景の一つ「唐崎夜雨」をモチーフとしている。唐崎夜雨とは、滋賀県大津市の唐崎神社に降る雨の景であり、同神社には有名な唐崎の松がかつてあった。同時代の名所浮世絵で著名な歌川広重の「近江八景」シリーズにも、夜空の下でシルエットとなって浮かび上がった境内の雄大な松にかかる雨の景が描かれている。この画題を念頭にして本図では、妓楼の二階座敷で格子越しに遊女が眺めている、降りしきる窓先の夜空の雨を夜雨として、そして窓際に置かれた松の鉢植を唐崎の松に見立てて表現しているのである。

## 唐崎の松の仕立て技術

ここで見逃してはならないのが、この連載だからこそ取り上げられる松の鉢植の姿かたちである。唐崎の松に見立てられた染付鉢の松の鉢植であるが、隣にはサボテンの鉢植が置かれているように、この遊女の生活の一部にありそうな添景としてさりげなく描かれている。しかしこの松の姿は、小振りの作ながらも丁寧な幹模様がつけられ、左右に枝をしっかりと伸ばした、本家にも劣らない雄大な姿に仕立てられているのである。しかもよく見ると、下枝と樹冠部の枝とを黄色に見える紐状のもので引き結んでおり、当時の育成上の整枝技術をもよく表現していることがわかる。本図制作以前の園芸書には既に「作り松」の仕立て方として枝ぶりを引っ張って整える技術が紹介されており、こうした技術を駆使した小振りの松盆栽が、絵師の周辺にあったことをうかがわせる貴重な描写が認められるのである。

このように絵画上の構成要素としても、また資料的な価値としてもこの小さな鉢植が重要な役割を担っていることが明らかとなった。しかしこの図像がただそれだけの意味で描かれてはいないことを第二の読み取りとして見ていきたい。窓際の松は、他ならぬこの絵の主人公である花魁の気持ちを表す、「愛しい人」を待たせたい。つゝの代理表象でもあると提起したい。

## 花魁の愛しい人——松に託した想い

この遊女は何を想い、降り続く夜空の雨を眺めているのだろうか。この絵の本質を読んでいくために、再び本図の題名に立ち戻ってみたい。

「逢身八懐」のうち逢身とは、近江八景を見立てたこの類の絵によく見るもじりである。逢瀬を重ねる吉原遊女の境遇を示すものと言える。ただし、八懐の「懐」については注意深く観察する必要があるだろう。大切に胸に想うことを意味するこの漢字を本図と重ね合わせて見ると、この遊女の真の姿を私たちは知ることができるのではないだろうか。吉原遊女の仕事は、本来的にはお客の仮初めの相手をするところにある。しかし、そうした日々の中にもこの人はという特別な男性が現れる日もあることだろう。懐にしまった秘めたる相手への想いが、花魁といえども心を捉えて離さない。逢瀬を重ねた大切な人を心に秘めた時は夜、一人でふと眺める雨模様のものである。

近江八景を見立てることをモチーフとして、吉原遊女を題材に描くことを要請された絵師は、こうした彼女たちの生き様を絵にすることを選んだのではないだろうか。心に感じた人が再び戻ってくることを、多くの客を前にしてただひたすら胸に秘めて待つしかない、吉原遊女の想いがこの絵の核心となる。それを絵師は、窓際で雨空を眺める姿で、秘めた心の懐を指先でつまんで閉じる切ないポーズとして表し、さらに愛しい人を持つだけの押し隠したその心を、そっと私たちに伝えるように、松の鉢植にさらなる意味を託して置いたのである。こう読んでみてはじめて、時のセレブとしてもはやされようとも、素顔は一人の女性としての花魁を、後れ毛もままならぬ何とも言えない物憂げな姿で描いたことの意味がわかってくるようだ。唐崎夜雨の見立てとの表面的な理解を越えて、その奥にある遊女の想いとそれを絵にした作者の意図を、私たちはいまじっくりと感じてみたいのではないだろうか。（続く）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■「秋風盆栽展」

概要：秋の気配を感じさせる葉もの盆栽や実もの盆栽等を紹介いたします。

会期：平成25年9月20日(金)～10月16日(水) 毎週木曜休館

主催：さいたま市大宮盆栽美術館

会場：コレクションギャラリーほか

■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール

田口文哉（たぐち・ふみや）

さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。

1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。